

二、口腔疾患と難治性疾患の治療法のための生活習慣矯正法

(一) 西研はどのようにして出来たか

私が東京医科歯科大学の学生だった頃のことだからもう 50 年以上も前の話である。島峰徹先生の創始されたこの大学が、昔も今の文明国に存在しない口腔科医科大学構想が中途挫折したままに、二つの国難で大きく変折して今日に至っていることを知るに及んで、医者の中の医者島峰流の「口腔科医」になるにはどうすれば良いかを考えて、島峰先生の源流をたどることにしたのである。

明治 33 年（1900 年）に出来た東大歯科学教室の余りの沈滞を見かねた小金井良精（解剖学）が本格的なわが国独自の口腔科医養成大学を作るべく、消化器内科の島峰をベルリン大学医学部歯科学教室に留学させたのである。

8 年間の研鑽の後に米国の歯科学校を見学して帰国した島峰はしばらくの間沈滞した東大の歯科学教室に籍をおいてから、大学作りの活動を始められた。先生の旧製の口腔科医科大学構想の大学のカリキュラムは、すでに長尾優先生の「一脇の歯学への道普請」にもおさめられていたので、大学を卒業したら、東大医学部の基礎か歯科口腔科の大学院に進み、島峰流のカリキュラムを実践しようかと考えたのであった。

昭和 40 年の 3 月に卒業し、4 月から 2 年間実地歯科治療にたずさわることにした。翌年の秋に東大口腔科の研究生となり、大学院受験の準備をした。その頃には、インターン廃止のための医科大学紛争が東大医と医科歯科大学ではじまっていた。42 年 4 月の試験当日は青年医師連合会シンパの学生が大学院試験をボイコットするためにピケを張っていたが、始まる直前には試験場に通してくれた。試験会場は医学部中央図書館であり、その館物に青医連のたまり場があった。医学部紛争は昭和 35 年頃にはやった安保騒動（軍国国家による今次大戦敗戦後の後始末の協定改正の紛争）の後に来た経済発展にともなう文化立国建設の第一歩としてのわが伝統的日本医学の復活の目論みとして、米国の占領によるアメリカ医学の象徴のインターン制度の廃止を当面の目標として、その後に無給医の廃止運動へと発展したのであった。

院の試験をパスしてから大学院の研修コースを可及的に最大限習得し、病棟にて顎口腔疾患に関する全科の診療を経験してから二年目に基礎医学の生化学教室で研究生生活に入って間もなく医学部紛争が大学全体に波及して入学試験も中止になった。若手研究者の会で活躍した後に研究生生活に復帰して、ミトコンドリアの突然変異発生の原因究明のための分子生物学研究で学位を取得した。この時に成功した原因の究明が、40 年後の難治性疾患の謎の解明と治療に役立つことになるのである。大学院を修了した頃に、当時極めて有能に見えた先輩 Y 氏にいたく気に

入られて、重用されて従っていたが、色々な点で Y 氏を凌駕することが多くなると、当然疎んぜられるようになった。30 歳で病棟医長となりその後 6 年間分院を任されて大活躍したが、本院に戻ってからは、昔の私に代る取り巻きの女医がでんと控えていてその後 4 年間も乾された。気が付くともう 40 歳を過ぎていたが、ペーパーは学位論文の「ミトコンドリアの突然変異究明のための分子生物学研究」の三編のみとなり、若気の至りで我が指導者選びに失敗したことに気付いたのが遅すぎてすでに後の祭りであった。医局生活では研究も手術も教育も殆ど出来ず、そのうえ 10 才年下の後輩の下につけられて、外来の初診とやさしい歯科口腔診療だけをさせられた。島峰流の口腔科医の学者生活を考えていたのに、とんだところに踏み迷って困惑したままに夏休みを迎えたのが 1980 年（昭和 55 年）頃であった。その頃、千葉の佐原に行ったところ、伊能忠敬の記念館があり、そこでにわかに伊能流に生きるすべを考えた。つまり閑職をこととして、これから準備して 50 歳を目途として研究生活に復帰すべく読書をはじめたのであった。隠居してからも天文学と測量をはじめた忠敬をはじめとして、夢を掘り当てたシュリーマン、床屋医者からモンペリエ大学の初代外科教授となったパレ、麻酔により「外科の夜明け」を切り開いたともに歯科医のウェルズ、モートンを研究した。またペリーの圧力で大騒動のすえに幕府が潰れた結果、日本国の体制も刷新された明治維新では、米国は自国の市民戦争（南北戦争）のために日本攻略では、ヨーロッパの英・仏・独に完全に後れをとったのであった。南北戦のさなかに外科と内科を担当した軍医エリオットがペンシルバニア歯科学校を卒業して歯科医となって日本に渡来し歯科医学とアメリカ文化（維新の頃の留学生による）によって日本を内面指導したのである。

閑職ついでに、形態学と機能学を深めるとともに、医学も総まとめにして、考察し、従来の形態的病理学分類では、その他に属する疾患群が、細胞機能の障害による代謝性の疾患群であることにいち早く気付いた。そして代謝の源が細胞小器官ミトコンドリアの糸粒体によることも気付いていたから、エネルギー産生の変調がこの一群の疾患の本態であることを察知した。これらの疾患群の特徴は、原因が単純ではなくておびただしい数の多因子の複合によることもすでにわかっていた。口腔の疾患では機能性疾患は、口腔粘膜疾患、歯周病、口内炎、顎関節症、舌痛症、三叉神経痛等があるが、これらは一般に多因子性の疾患と考えるとおさまりが良い。このうち最も複雑雑多な因子でおこるのが歯周病である。これ迄見落とされていたのが、食物咀嚼時の食塊の磨砕時に歯肉部に生じる圧迫力すなわち臼磨時の力学エネルギーである。これらには歯間隙のフッドインパクションや冠のねじれによる歯根面と歯肉の付着部の剥離、寝相や頬杖等による歯の側方力による歯の動揺、歯冠形態の不適當、口呼吸による歯肉部の乾燥等数え上げればきりが無い。これらを一時にすべて制御しなければ治せない。歯列に段差があってもねじれが

あっても歯肉は破壊的障害を受ける。目を転じて内科的疾患も殆どすべてが超多因子疾患であり、そのベースにはほぼ確実に冷中毒と口呼吸が存在するから、これをまず正さなければならないが、いまだにこれが改められないのだ。

上司の制約が無くなった段階で新しい研究分野をたった一人で開拓するには、今日の医学と生命科学で完璧に見落とされているこの多因子複合体の本体が何であるかを突き止めるだけで良かった。今日の隆盛を極めたとされている分子生物学や自己非自己の免疫学、細分化され尽くした臓器別医学、遺伝子工学、ヒトゲノム計画のどこに盲点があり、これらをどんなにチームで研究しても絶対に究明できそうにない「脊椎動物の進化の学問」を樹立するにはどうすれば良いのかが自ずと解かる道が見えて来たのである。

まず、分子生物学樹立の端緒となったシュレーディンガーをよく研究することが肝要である。次いで進化の学問に深く関係していると確信しているゲーテの形態学の定義とラマルクの形態変容の用不用の法則、個体一代限りの形態変容のきまりのウォルフの法則、ヘッケルの生命発生原則の個体発生と系統発生の関係、三木成夫の生命の形態学の顔と口腔、咽喉と頸部・心肺の鰓腸の変容の法則性の究明と、この背後に潜むこれらに深く関与するあらゆる種類のエネルギーを解析することである。ここで常に問題となるのが、今日の生命科学を惑わすダーウィンの目くらましの進化論の有利不利仮説である。シュレーディンガーから三木成夫に至るまで、ともするとこのダーウィンの目くらましの陥し穴に陥ることが多々あるからである。今日最大のこの系統の学問の欠陥は、学問対象に関する定義が一切欠落していることである。「生命とは何か」でもシュレーディンガーは生命の定義は一切なく、ただごちゃ混ぜに、バクテリアファージ(ウイルス)から細菌、カビ、原生動物、多細胞の動物、植物、キノコ等一切をごちゃ混ぜにして論じている。つまりダーウィンと同様に博物学ムゼオロジーで物を考えているのだ。これはラマルク以前の学問である。彼がこれから生物学を分離してから、この方ムゼオロジーは今日では小学生の理科として扱われているのである。今の生命科学は、このために大混乱しているのだ。例をあげればヒトゲノム計画を立案しても、ゲノムサイズが一番大きい動物が両生類になりそこなった肺魚である事を知る者がいないのだ。冷血動物は血中のみならず体細胞中にもありとあらゆるウイルスと細菌が共存してその遺伝子の中にまで組み込まれてジャンク遺伝子となっているので、ヒト(哺乳動物)を100とすると肺魚のゲノムサイズは3000もあるのだ。冷血動物はもとより哺乳動物でも体温が下がると自動的に腸内のあらゆる常在微生物が白血球を介して体中に播種されることを一部の医者を除いて知るヒトがいないのである。こんなことだから今日文明国では、冷中毒で難治性疾患が激増しているのだ。

上司のY氏は、ドフトエフスキーの小説に出てくるスタヴローギン氏のごとく、

はじめは弁舌さわやかに人を引き付けて、わが歯科口腔外科の由緒ある学会の「口腔科学会」を、言葉巧みに「口八丁、手八丁」で昭和 50 年から 62 年頃まで占拠し、この業界の没落をもたらしたのだ。Y 氏が力を失って、漸く自由自在に研究と診療と教育を行う環境が回復したので、今迄世界中で誰一人として考えたこともない「歯の働きとは何か？」を物理学（エネルギー）の観点から考え、「生命とは何か？」をエネルギーの観点から深く考察した。すると今迄の進化学も免疫学も難治性疾患の発症の原因も治療法の謎もすべて重力エネルギーをはじめとする環境エネルギーと生命の源の糸粒体のエネルギー代謝と動物の動きの生体力学エネルギーの三者の統合のもとに究明されたのである。東大病院の在職中にほぼこの目安が立ったので、たった一人でこの現代医学と生命科学の謎解きを完成させるべく、今から 14 年前に小さな小さな研究所をたてて、医者を採用して顔と顎口腔の医学を中心に免疫病と進化学のほぼすべてを究明することが出来た。

（二）実践編 西原研究所スタッフ一同

〔鈴木貴統、木内将伍、寶力綾奈、大越由紀子〕

これらの疾患治療の大元となる誤った生活習慣の矯正法を習得するには、その前に何故生活習慣という主として生体力学エネルギーや温熱寒冷エネルギー、重力エネルギー等で病気が起きるのかを理解する必要があります。それにはまず、これ迄完璧に失念されていた質量のない物質エネルギーと口や喉、腸内に共生している腸内微生物について、これ迄知られている事実のすべてを知り尽くしたうえで、これらすべてを導入してヒトの体のしくみを根本的にわが宗族のオリジンに立ち帰って解き明かしましょう。その上でヒトの体と病気との関連を深く考察し、さらに病気の予防をしたり回復させるべき正しい生活習慣の行動様式すべてと呼吸体操法や、病気を的確に治療出来るように診断するニューロン・ミトコンドリア共鳴診断法の解説も行います。

以下 6 項目に分けて説明します。

- | | |
|------------------------------|--|
| 1. 身体のしくみ
(大越、土本) | 4. 体の正しい使い方のための呼吸法
(木内、土本) |
| 2. 腸内微生物と体のしくみ
(寶力、鈴木) | 5. ニューロン・ミトコンドリア共鳴診断法
(鈴木、木内、大越、土本) |
| 3. この両者とエネルギーとの関係
(鈴木、土本) | 6. 八正道
(寶力、木内) |

1. 多臓器多細胞のヒトの体を統一個体としてどのように制御しているのかをまずはじめに理解しないことには、身体のしくみも病気になるしくみもわかり

ません。

これ迄の高等生命体の最小のいのちの単位は細胞でしたが、これが間違いのもとで細胞内に数千個も生きている細菌の一種のミトコンドリア（糸粒体）です。これさえわかれば後は簡単です。ヒトの体を大づかみで見ると、筋肉の動きをつかさどる脳脊髄神経系と、動くことをつかさどる体壁系および内臓腸管系の筋肉系の二大システムがありこの二つの仲を取り結ぶのが心臓血管リンパ系です。さてこの仲を取り持つ器官は、どこにあるのでしょうか？

これはヒトの胎児では、個体発生の初期（32 日目）に口の粘膜が脳方向に陥凹して出来るラトウケ嚢に由来する脳下垂体です。脊椎動物の源のホヤではエラの背側中心に脳筋肉系のオリジンとして大型の脳下垂体があります。ヒトでは、脳に集まったすべてのエネルギー等の刺激は網様体を通して視床・視床下部に集中しニューロンで情報蛋白質に物質変換されて脳下垂体一点に集中します。細菌やウイルスを抱えた顆粒球と栄養と酸素を抱えたすべての物質情報系である血液は内頸動脈から一直線で脳血液関門のない下垂体から脳内に入り、一方椎骨動脈からも脳内の血液関門のない二つの脈絡叢から脳髄に入るのです。こうしてエネルギー情報形も神経情報系物質情報系のすべての情報がこの下垂体門脈の一点に集中して、この門脈血を介してこれらすべてが、脳内を含むあらゆる全身の器官の細胞内のミトコンドリアへと配達されます。血液が汚染されて細菌が播種されれば、器官の細胞内に感染が起こり、糸粒体が動けなくなつて細胞がぐったりします。これが免疫病や難治性疾患（精神病や癌）の実態なのです。

2. 腸内微生物と体のしくみ

口・喉・鼻腔・胃腸には数え切れないほどにおびただしい数の微生物が生きて住み着いています。これらは、口呼吸を続けたり、腸が冷えたり、手や足、頭を冷やしたりすれば、腸扁桃（パイエル板）から未分化間葉細胞内に自動的に吸収されて顆粒球となり、体中を巡ってこれらをいたるところの細胞内に播種します。細胞内感染症ともなれば、糸粒体の栄養分が横取りされて細胞の働きが駄目になります。これが難治性疾患の本態です。

元々ヒトの身体の血液内には全く無害の微生物が少しは共存しています。余り多量になると障害がでるのです。わが宗族の源のホヤの体制を考えて見ましょう。口の中に鰓と脳の源となる脳下垂体がむき出しで突出し、これに口があり体を巡る血液の流れる血管と交通しているのです。口中の鰓の中にも血液内にもバイ菌もウイルスもいっぱい共存しています。表皮は殻で覆われていますが、元々これは外胚葉上皮細胞由来で、その

皮下には、波で受動的に動くようになった筋肉組織があります。外胚葉細胞の

刺激は膜に伝えられると、それが筋肉に伝達されてその刺激で筋肉が動くようになるのです。この外胚葉細胞が神経細胞となります。外皮の海水にも最近ではウヨウヨいますから細胞内にもミトコンドリア（元は細菌）とともにこのバイ菌も棲みつきます。細菌とミトコンドリアは10数種の1粒のアミノ酸とその誘導体を餌として代謝したり分解します。神経細胞の働きはこうして発生すると考えられます。我々口頭哺乳動物と原始型のホヤとの違いは冷血性か温血性だけです。体を冷やすと冷血動物システムが作動します。

3. ヒトの体と細菌やウイルスと環境エネルギー（寒冷・温熱と湿度・重力）との関係を知ることも病気発症のしくみを知るうえで大切です。わがヒトのいのちの最小単位である糸粒体は20億年前に大型の真核生物に寄生したリケッチアに似たプロテオ細菌です。細菌にも動物の細胞にもともに通常至適活動温度が決まっています。恒温動物の糸粒体は、体温より低くなると働きがにぶくなり、ヒトで38℃にもなれば大活躍し、42℃以上になると死んでしまいます。またヒトの口や喉・鼻腔・胃腸・泌尿生殖器内には、おびただしい数の殆ど無害の常在性の細菌とウイルスが共生しています。これらの微生物は、体温が1℃でも下がるとこれらの器官に存在する扁桃リンパ組織の袋状のM細胞内のステムセル内に自動的に大量に取り込まれます。これがバイ菌やウイルスを抱えた顆粒球です。これは、冷血動物のシステムです。今の医学では、免疫学でも細菌学でもこのことを体得している学者が皆無です。このことはホヤの体のしくみを見れば、すぐに解ることですが原始動物のしくみは、口腔の鰓と腸管内の栄養物も細菌もウイルスも全て血液内を巡り、完璧にこれらが血中に共生して生きています。哺乳動物も、最短時間で冷血動物時代を乗り越えて来ていますから、体を冷やすと、腸の細胞内糸粒体の働きがにぶり、自動的にバイ菌とウイルスに汚染された顆粒球に抱えられた微生物が血中を巡って体中の細胞内に播種されて、様々な臓器の細胞群の腸内の細胞内液がバイ菌とウイルスに汚染されます。

どんな臓器や器官の細胞群が汚染されるかで、症状と病名が決まります。この汚染状況はCT、NMR、MRIを眼視して見ても皆目わかりません。これを診断できるのは、西研流ニューロン糸粒体共鳴診断法のみです。

4. 姿勢を正す美呼吸体操法とこれを実行するための美呼吸デバイスとグッズ
ヒトの姿勢は、寝相・口呼吸・片噛みでの生活習慣によるエネルギーで寝ている時に決まります。これが自重による重力の作用です。

これを正すための呼吸法が美呼吸体操と寝相矯正体操です。ヒトの呼吸を真に理解するためには、まずわが宗族の源になる原始脊椎動物のサメと哺乳類のヒ

トの体のしくみを比較して呼吸筋肉の共通性を知らなければなりません。その上でどうすればよいのかをお示しします。

美呼吸デバイスとグッズを図 6 - p30 に示します。

5. 西原流ニューロン系粒体共鳴診断法

【原理】

地中の水脈を探る方法として昔から使われているダウジングという方法がありますが、これは水が流れると流動電位が生じ、この電位を検者の脳内の手の筋肉を動かすニューロン内のミトコンドリアの共鳴現象によって感知して、杖を持つ手が自動的に動いて、これにより水脈の存在を判断する手法で、生物共鳴（バイオリゾナンス）現象の応用手法です。この手法を病人に応用したのが Energy-based Quantum Medicine です。

CT スキャンも NMR も量子もつれ（entanglement）をコンピューター断層画像に撮影したものですから、その画像に含まれるクォークレベルの情報を感知することにより病気の診断と治療は容易で確実なものとなります。

すべての細胞内には電子伝達系による呼吸をもつばらとするミトコンドリアが存在し、細胞内に毒物や細菌・ウイルスの汚染が生ずればこの電子流に障害が生じます。これが細胞レベルの免疫病です。これを検者が検知する事が出来るのです。これが新しいミトコンドリアリゾナンス診断法 Mitochondrial Resonance Diagnostics (MRD)です。これにより難病の原因の究明がきわめて容易になりました。難治性の免疫病も、癌も精神病も、病原微生物とは無縁の口や喉や腸内の常在性の微生物が白血球（顆粒球）によって体中にばらまかれ、色々な器官や組織の細胞群に細胞内感染を引き起こして発症する事が明らかとなったのです。治療はこの細胞内感染症を治し、ミトコンドリアの元気を回復すればよいのですから、これらの三種の疾患の治療法は殆どすべて同じです。完治することがこの考え方の正しさを示すエヴィデンスです。従来の方法に比べて診断も治療も極めてやさしいうえに確実になりました。難治性疾患も手遅れでないかぎり治すことが可能となりました。

この原理を真に理解出来るヒトが今は僅少です。何故かと言えば、物質とは何か？重力とは何か？光とは何か？を真に究明しなければ解らないからです。本会長の西原は歯の本質的働きが“衝突”現象にあることを知り、これを深く考察して重力と光とエネルギーと時間と空間との関係を究明しました。そして出来たのがニューロン・ミトコンドリア共鳴診断法です。

これの実際についての示説を 15 分だけ行います。これらの手技の習得には時間が必要のため、実習講習会を別に行いますのでご参加下さい。

6. ミトコンドリア西原博士の八正道

- (一) 子育てを伝統の日本育児法に戻す
- (二) 常に姿勢を正す (正しい睡眠姿勢)
(正しい座位姿勢)
(正しい立位姿勢)
- (三) 絶対に口呼吸をしないで鼻呼吸 (睡眠時も)
絶対に口呼吸でスポーツをしない
- (四) 絶対に冷飲料・アイスを摂らない
- (五) 食べ方を正す
食事は両側で 30～50 回咀嚼、丸呑みしない
- (六) 睡眠は大人で 8 時間、子供で 10 時間
- (七) 炎天下では必ず帽子をかぶる
炎天下では絶対に水泳以外のスポーツをしない
- (八) 寒い時は絶対に体を冷やさないで常に温める